

## 9. 熊本県天草市上田家文書調査

東 昇

### 1. 天草市の現地調査

天草市の上田家文書は、幕府領肥後国天草郡高浜村の庄屋文書で、約7000点が現存する。1997年以来調査を継続し、研究成果として、2016年に『近世の村と地域情報』（吉川弘文館）を刊行している。今年度は科学研究費助成事業基盤研究（B）「聖地・霊場の成立についての分野横断的比較研究」（研究代表：菱田哲郎）の一環で、引き続き調査を進めた。

今年度の調査は、2021年11月17日～21日の5日間、12月に実施した天草巡検関係の調査を、上田家資料館において有賀陽平氏（神戸市文化スポーツ局）と実施した。

上田家資料館（天草市、上田陶石合資会社内）では、上田家文書中の天草崩れの取り調べに関与した高浜村庄屋上田宜珍の庄屋期（寛政5年（1793）～文化15年（1818））の日記を調査選定し撮影した。

### 2. 疱瘡流行と迫・家

また、2020年度日本学術振興会：課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム（研究テーマ公募型））「パンデミックの歴史研究に基づいたポストパンデミックの社会・環境理論の構築」（研究代表：藤原辰史）の研究の一環として、「近世後期天草郡高浜村における疱瘡流行と迫・家への影響」（『京都府立大学学術報告（人文）』73、2021年）をまとめた。

本研究では、これまでの文書調査の成果を踏まえて、高浜村における文化4・5年の疱瘡流行が村社会・地域に与えた実態と影響、特に迫や家・人に注目し分析を行った。方法として、①疱瘡流行期に作成された文書を精査し、迫全戸の状況や難儀者などを明らかにし、②切込・遠慮・他国養生の対象となった家、支援物資提供者の実態、③文化期の宗門改帳から疱瘡死による家族の構成の変化・影響、特に家頭の死亡と女性に焦点をあてて分析した。

その結果、近世子供病化していた疱瘡は、高浜村では病人の半数が30代以上であり子供病とはいえない。そして、この世代に多い家頭の死去は家の継承や難渋者の増加につながり、その他、奉公先での感染、酒盛や宿泊など接触機会の多様化・広範囲化、治療で来村した六部の排除や高齢死亡者の疱瘡感染疑惑の発生、養子が養父母を感染死させ、その後起こした内済一件による精神的影響等、数多くの問題が発生した。成人を含めた多世代の疱瘡罹患が抱える問題は、様々なパンデミックの事例、特に今回の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とも比較が可能である。